

百済墓制の展開と王権の動向

Development of Baekje Burial Practices and Dynamics of the Baekje Dynasty

山本孝文

YAMAMOTO Takafumi

はじめに—目的と展望—

①基礎情報の提示と再整理

②百済墓制の階層性と被葬者

③墓制の変遷相と王権の動向に関する考察

まとめ

【論文要旨】

本稿では、①百済地域の墳墓の再整理により墓制の変遷相を確認する作業、②王・王族に関わる墓制を抽出しその展開を把握する作業を通じ、百済王権の動向を古墳資料から跡付けることを試みた。百済地域の墓制を大きく分けると、木棺墓を基本として地域・集団ごとにそれを多様に発展させた「在地系墓制」と、高句麗や中国から影響を受けた積石塚や埴築墳などの「外来系墓制」がある。このような在来の墓制と外来の墓制が混在する百済地域の墳墓は、多様化（第1段階）、集約・序列化（第2段階）、斉一化（第3段階）の段階を経て変遷しており、その中において支配者階層の墓制（王陵）は外来墓制の取り入れを基軸にし、しばしば周辺墓制との差別化が図られたが、王権の不安定さを反映して下位階層の墓制と同化する状況も見られる。本論では、このような王陵とその他の階層の墓制との優劣関係の変化から、百済王権の動向を揺籃期・成長期・衰退期・中興期・転換期・成熟期に分けて叙述した。百済の王権は成立期から一貫して地域内の絶対的権力であったわけではなく、時勢によって他の勢力から隔絶したり、時には埋没する不安定な存在であったといえる。さらに百済内部における各地域の墳墓の多様性から推定される地方勢力の独立性も百済王権の不安定さを物語る。墳墓に見られる外来的要素は、各地域集団との抗争・協力関係の中で、百済王権が国内における優位性を獲得・維持しようとする意図と努力を示すものと考えられる。墳墓の展開と文献百済史の流れを比較することで王権の消長の歴史的背景をうかがうことも可能であるが、文献の内容に過度に引っ張られた解釈に陥らない努力が必要である。

【キーワード】 百済、木棺墓系墓制、石室系墓制、積石塚、埴築墳

はじめに—目的と展望—

本稿の目的は、韓半島三国時代の百済地域で築造された多種多様な墓制を系統立てて整理することと、墳墓の階層構造（特に最高支配者層の墳墓である王陵級古墳とその他の階層の墳墓の関係）を確認しその変化プロセスを把握することで、百済の有力階層の中における王権の消長を跡付けることである。王陵と他階層の墳墓を通史的に比較すると、階層差を伴う質的な格差は時期により変動することが見て取れる。この時期の墳墓の築造が政治的行為であることを前提とすると、この動向は他階層に対する百済王権の相対的な優越・非優越の度合いを表していると考えられる。

論展開の手順としては、まず基礎情報の提示として百済地域で確認されている墓制の種類と系統を再整理し、これまで百済考古学で無批判に使用されてきた時期区分について見直す。次に前提として墳墓に見られる階層性を確認して王陵と呼べる墳墓を再検証し、最後にそれらをもとに百済地域の主墓制と王陵の変遷を組み合わせることで王権の動向について考察する。

なお、本稿で用いる「百済墓制」は、百済地域の墓制の意として使用する。本来、「百済の墳墓」などの語を使用する際には、そこに多様な意味が含まれることを認識しておく必要がある。「百済」は文献や出土文字資料に記された歴史的な存在で、政治的な「国」である。従って百済の墳墓という際には、狭義には百済国に帰属する墳墓ということになる。しかし実際には、厳密に百済国が政治的に関わった墳墓が全域に広まるのは、百済の歴史上、最終段階にあたる時代になってからであり、それ以前に国の墓制といえるものは少なく、せいぜい王権に直接関連すると思われるもののみである。ただ、文化的・社会的まとまりを持つ三国時代の韓半島中西部を的確に指し示す地理的用語は汎用されておらず、実際には「百済」を特定の空間範囲を示す地理的用語としても使用している状況である。従って本稿の「百済墓制」も、百済国やその支配下に完全に編入された集団の墓制という狭義の意味だけではなく、三国時代の韓半島を最終的に三分割したであろう3つの国のうち、文化的・社会的にある程度のまとまりを示す西南部地域を指す語として用いる。具体的な現在の行政区では、京畿道・忠清道・全羅道となる。

①……………基礎情報の提示と再整理

1 百済地域の墓制の多様性

百済地域では多種多様な墓制が確認されており、その多様性は高句麗・新羅・加耶など同時期に存在した他地域の墳墓に比しても特殊である。本稿のテーマに沿って被葬者の階層を類推するために、まず墓制の種類把握が必要である。ただし、墓制の種類差が階層差・時代差・地域差（集団差）のいずれを表すのか、あるいはその複合的特徴を持つものなのか（例えば集団間階層差など）、さらに一時的な思想や社会情勢の転換を表すものであるのかは検討が必要であり、多様性の原因としてそれら諸要因を複合的に検討する必要がある。

百済の墓制を種類ごとに概説的に整理・解説した著作は多い。これらはすべて百済墓制の概念整

理に寄与した作業で、百済の古墳について学習する際には有用である。一方で、これまでの百済墓制に関する記述は、各墓制に対する説明の羅列が多くを占め、墓制相互の関連や多様性の意味について本格的に考察したものは少ない。墓制が多様化した要因を求め、その展開を理解するためには墓形式の系統的把握が必要であり、系統の異同を把握することが百済地域における階層差・集団差の派生と葛藤を明示することにつながると考える。

まず王権成立以前の当該地域について触れると、本格的な三国時代の到来以前の原三国時代、韓半島の西南部地域（湖西・湖南地域）は馬韓と呼ばれた勢力が存在したとされる地域で、韓半島東南部地域（嶺南地域）の辰韓・弁韓とは異なる緩やかな文化的紐帯を持つ地域であった。この地域の墓制は埋葬施設の周囲に溝をめぐらせた周溝墓が主流であり、地域によって、旧地表面下に埋葬施設を設け丘陵斜面の上方に主に周溝をめぐらす清堂洞型周溝墓と、盛土内に埋葬施設を設け四周に周溝をめぐらす寛倉里型周溝墓に大別される。これらは周溝土壙墓とも呼ばれるが内部主体は木棺で、その系譜は前段階の初期鉄器時代まで遡る可能性がある。この時期、韓半島南部地域では木棺を埋葬主体とする墳墓が一般的であり、百済の初期の墓制もその伝統の中から発展したと考えられる。

この伝統墓制の継承・非継承の観点から百済の墓制を整理すると下記のようなになる。

木棺墓系墓制

まず、原三国時代以来の墓制を各地で連続的に継承して変遷したと考えられる種類を一つにまとめ、木棺墓系墓制とする。百済墓制の根幹をなすもので、百済初期の多くの墓制は木棺墓の延長線上において発展したといえる。この系統に含まれる墓制には木棺墓（土壙木棺墓）、木槨墓、墳丘墓、木棺封土墳（葺石封土墳）などがある（図1～3）。求心性の高い単一の地域や集団による築造ではなく、広い範囲に存在した地域集団ごとに独自に伝統墓制を発展させた結果の多様性であるといえる。形式は様々であるが、副葬遺物として少量の鉄器や馬具、土器、稀に中国産陶磁器が確認される点において共通しており、墓制間に明確な優劣の差（階層差）は見られない。ここでは、これらのすべてを伝統的な木棺墓の派生型と考えておく。

堅穴式石槨墓は、埋葬施設の構築素材に石材を使用する点で百済地域の伝統的な土壙系統の木棺墓とは大きく異なる。ただし、内部からは鉄釘や鏝が出土し、やはり木棺が納められたことがわかる（図4）。百済の石槨墓は新羅や加耶のものに比べ総じて小型のものが多く、木棺を囲むだけの規模しか持たないのが通例で、石材を精巧に整えたり壁面の内面を揃えることには神経を使っていない感がある。天安龍院里9号墳のように中国産の陶磁器が副葬される例もあり、規模や副葬品において木棺墓や木槨墓と共通しているため、やはり伝統的な木棺墓からの発展型で、木棺墓系墓制の一派生型ととらえるのが妥当であろう。ただし、原州法泉里、公州汾江里、高敞鳳德里など一部の遺跡では、内部空間が広く内壁面を丁寧に揃えた堅穴式石室とも呼べるものがあり、これは堅穴式石槨とは系統を異にするものとみた方がよい（図5）。おそらく横穴式石室との関連で築造されたものであろう。

以上の諸墓制は、原三国時代以来の伝統墓制を継承した発展型として理解することができ、外部にその系譜が求められるものではないという点が重要な共通点である。木棺墓の基層墓制を維持し

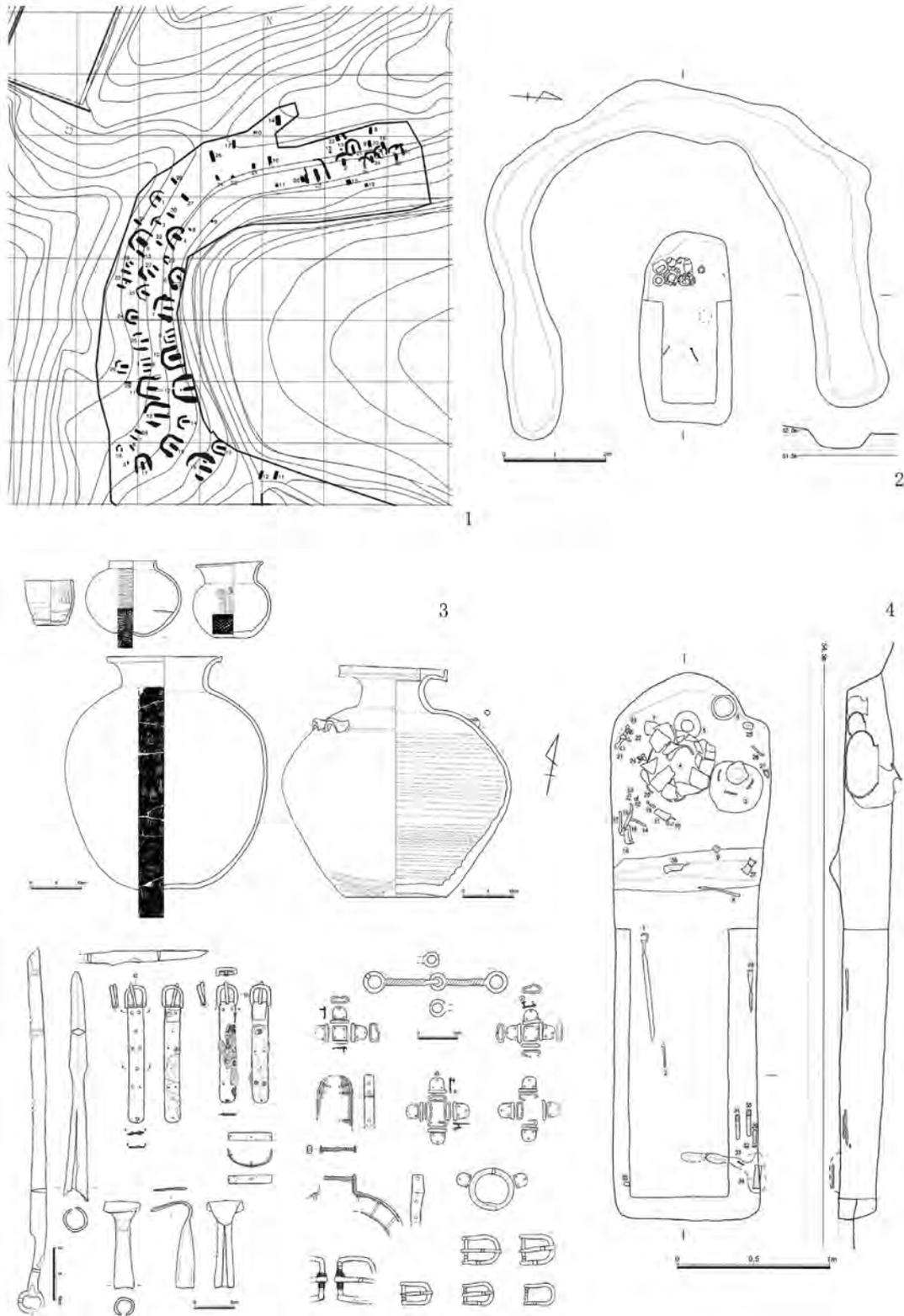


図1 百済の周溝木棺墓 [京畿文化財研究院 2012]

(1. 烏山水清洞遺跡4地点 2. 水清洞4-10号周溝木棺墓 3・4. 水清洞4-25号木棺墓出土遺物と遺構)

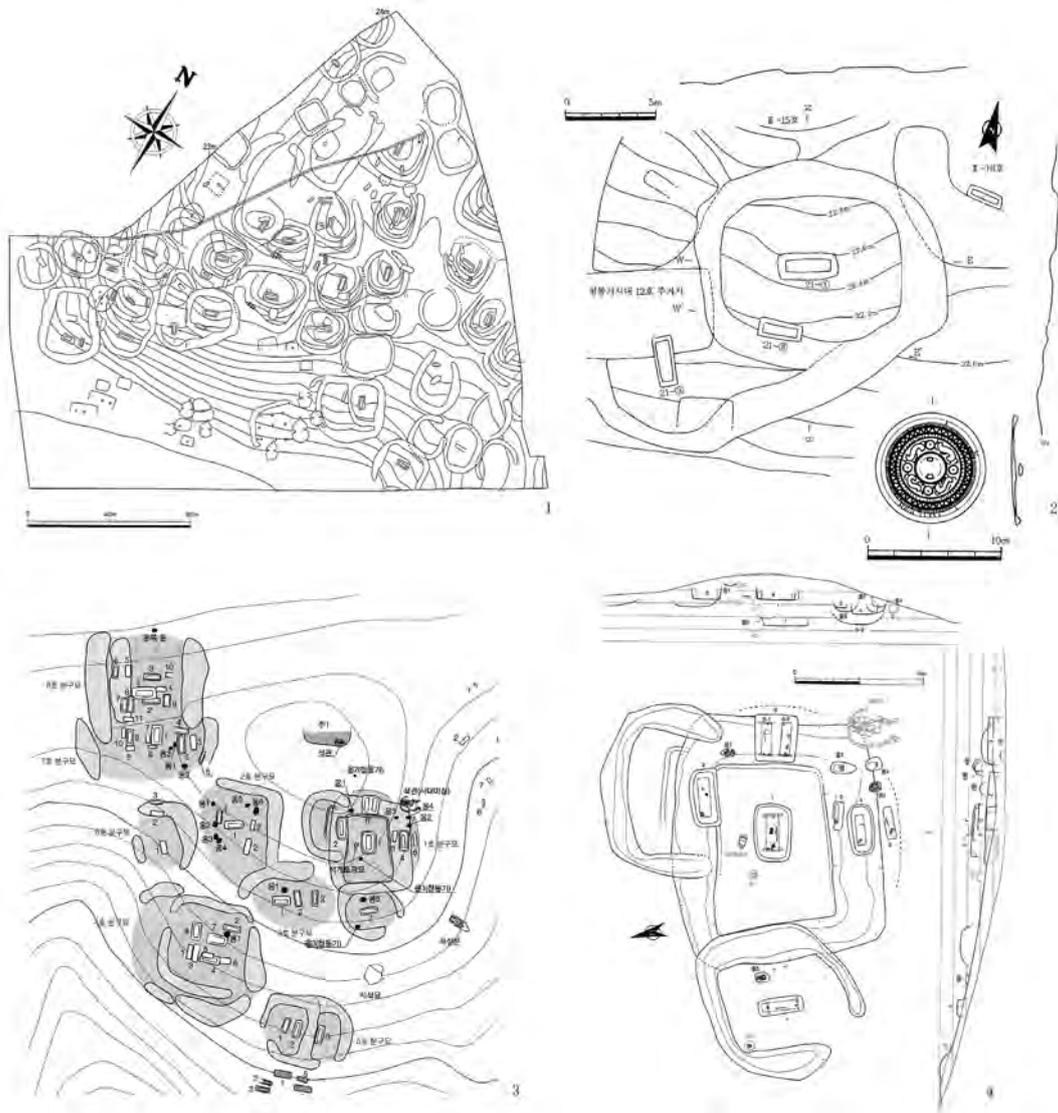


図2 百濟の墳丘墓 1 [李南奭・李賢淑 2009, 金承玉他 2010]

(1. 瑞山機池里遺跡墳丘墓 2. 機池里Ⅱ-21号墳丘墓 3. 完州上雲里遺跡ナ地区墳丘墓 4. 上雲里ナ1号墳丘墓)

ながら多様化した要因としては、集団の多様化を想定することができる。すなわち、まだ中心的な集団（仮に百濟王権とする）の台頭を見ず、政治的・文化的に完全に均質化していない同系集団（馬韓集団か）が引き続き各地に存在しており、伝統墓制をそれぞれの地域集団ごとに異なる墓制に転換させることで集団のアイデンティティを表現していたのではないかと考えられる。

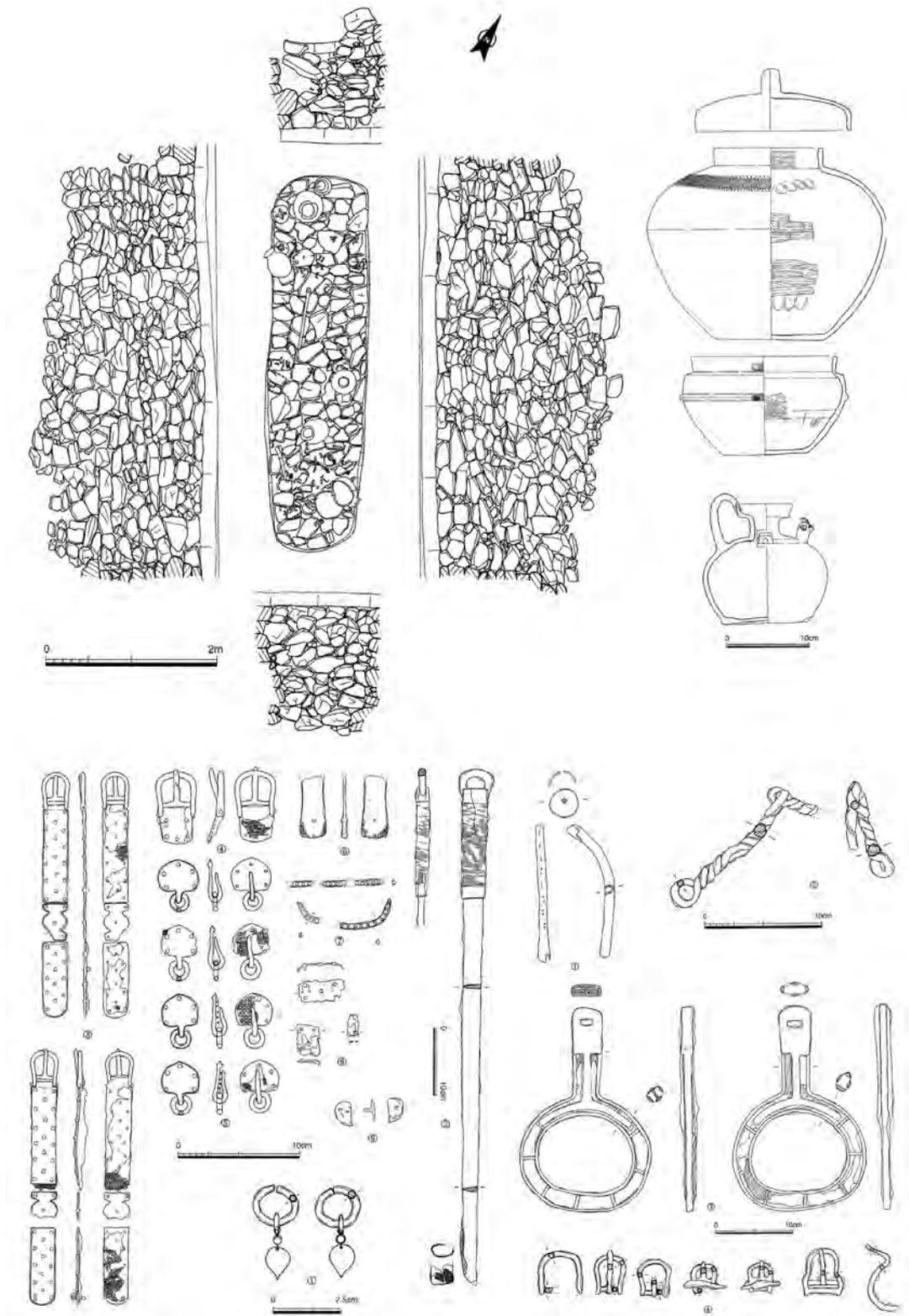


図4 百濟の豎穴式石槨墓 [李南爽 2000c]
(天安龍院里 9 号墳の豎穴式石槨と出土遺物)

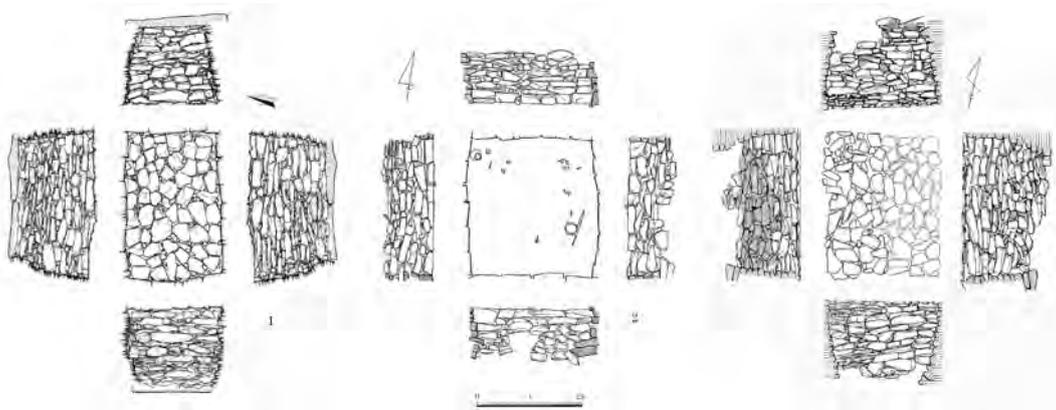


図5 横穴式石室の影響を受けた石室 [馬韓・百濟文化研究所 2012, 李南奭 1997, 宋義政・尹炯元 2000]
(1. 高敞鳳德里1号墳 2. 汾江・楮石里13号墳 3. 原州法泉里4号墳)

積石塚

百濟地域の多様な墓制の中には、在来の墓制から発展したものではなく、外部からの何らかの影響のもと出現したと考えられるものがいくつか含まれている。代表的なものに現在のソウル市の江南に残る石村洞古墳群の積石塚がある(図6)。この地域にはもともと多くの古墳が散在しており[丕가영 2012], 消滅したものの中にはより多くの積石塚があった可能性も高い。現在残る積石塚のみで見ると、規模・構造・副葬品・立地などの面において他の古墳より優位な階層の占有物であったことがうかがえる。漢江流域以外の地域では確実な積石塚が見つかっておらず、現存するものも時期的に限定され後続するものがないことから、特殊な状況下で短期間に造営された墓制であることは疑いない。



図6 ソウル石村洞4号墳
[ソウル大学校博物館・ソウル大学校考古学科 1975]

石村洞古墳群の積石塚は、基壇階梯式の構造的な特徴から、高句麗地域の積石塚との関連で築造されたとみる見方が一般的である。構築材が石材のみであるのか、内部に粘土を充填したのかによって高句麗式・百濟式に分類し、それぞれ築造時期が異なるとする説もあるが[林永珍 2005], 詳細な検討には材料不足である感は否めない。最低限ここでは拠点的城市(風納土城・夢村土城)に隣接する地域に築造されている点、百濟地域

他の墓制に比べ外観や規模を十分に意識した造りで、築造に投入された労働力も著しく異なる点、当該地域の伝統にない石築墓である⁽¹⁾点を指摘しておきたい。

磚築墳

公州の王陵級古墳を中心に採用されたことで知られる磚築墳も、百濟地域の在来の墓制から発展したものではなく、外来系の墓制である(図7)。その築造には、磚の生産から構築まで在地の伝統にはない技術が必要である。韓半島ではかつて楽浪の墳墓に漢系の磚室墓が受容され一定期間造営されたが、楽浪の墳墓と百濟の磚築墳の間には200年余りの時間差があり、直接の関係はみとめられず、技術も断絶している。百濟地域で導入された磚築墳は、形態・構造や出土遺物などの点からも中国南朝墓との直接的な関係が明らかであり、特に宋山里6号墳出土磚の「梁官瓦為師矣」銘や歴史書に記録された内容から、南朝の梁との頻繁な交流の産物であることがうかがえる。武寧王陵の例からわかるように、磚築墳の採用自体は特定の時期・地域・階層の墳墓に限られるが、その構造はその後の百濟墓制の展開に大きく影響を与える。すなわち、百濟後期の横穴式石室の構造は、磚築墳のトンネル形の構造を継承したものである。上の積石塚と同様、特殊な状況下で限定的に支配階層に導入された墓制であるが、外来墓制の系譜が多様である点は百濟王権の性格と歴史展開を考える上で重要である。

横穴式石室系墓制

東アジア諸地域で共通して導入される横穴式石室は百濟にも定着し、全域に浸透する(図8)。木棺墓系統の伝統墓制を持つ百濟においては、石材を構築して内部空間を設けるタイプの横穴式石室

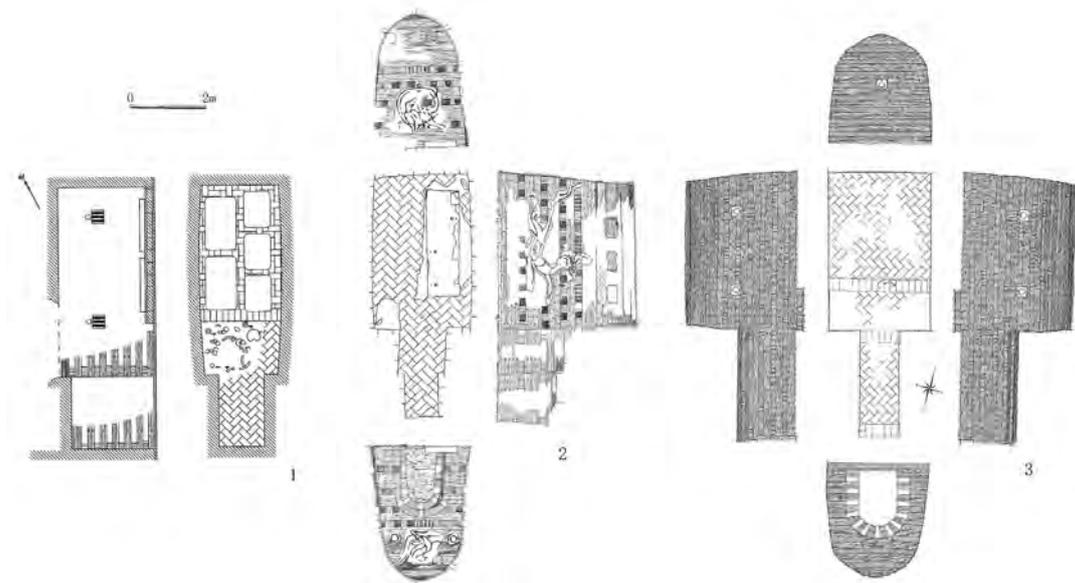


図7 中国と百濟の磚築墳 [当塗県文物事業管理所 2008, 有光教一・藤井和夫 2002, 国立公州博物館 2009]

(1. 馬鞍山地区来隴村南朝墓 M4 2. 公州宋山里6号墳 3. 公州武寧王陵)

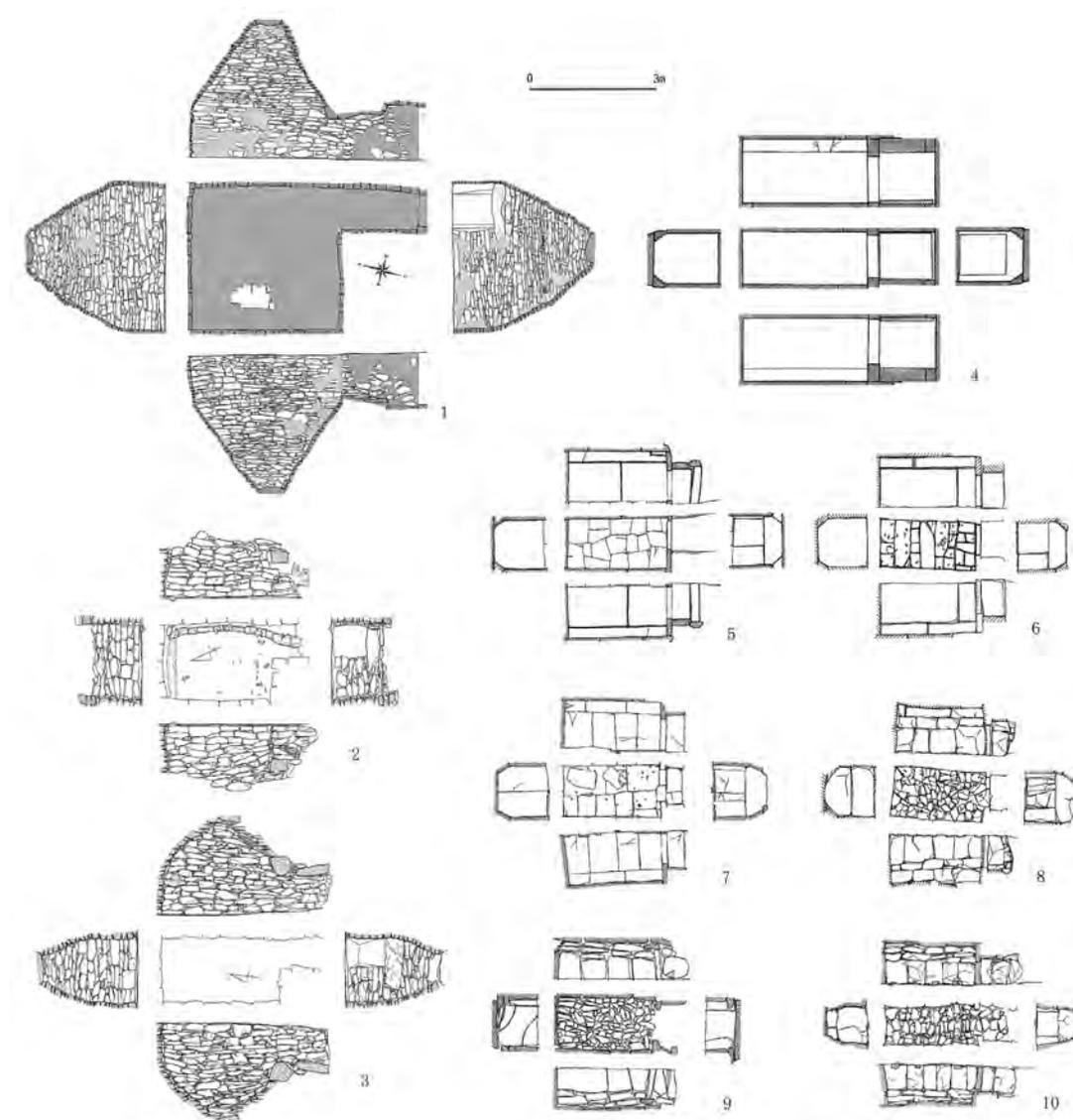


図8 百済地域の横穴式石室 [国立公州博物館・公州市 2012, 柳基正・梁美玉 2002, 李南夷他 2003]
 (1. 公州宋山里 5号墳 2. 公州金鶴洞 1号墳 3. 公州金鶴洞 2号墳 4. 扶餘陵山里西下塚
 5. 扶餘陵山里ヌンアングル 36号墳 6. 扶餘塩倉里Ⅳ-8号墳 7. 扶餘塩倉里Ⅲ-87号墳
 8. 扶餘塩倉里Ⅳ-66号墳 9. 長城鶴星里 A6号墳 10. 公州山儀里 44号墳)

の出現は技術的にも思想的にも内的発展によるものではない。また、類似構造を持つ前述の宋山里古墳群の埴築墳からアイデアを得たものではないことも、年代的に埴築墳より先行するものが存在することから明らかである。百済地域の横穴式石室の論点は、その系譜をどこに求めるかという点と、その導入と定着をはじめに主導したのが中心勢力であるのか、あるいは地方勢力であるのかという点である。系譜に関しては高句麗の石室、楽浪の埴室墓の発展型である石室などが挙げられてきたが、近年の調査で百済地域の早い時期の石室にはかなり多様な類型が混在していることが明らか

かになってきており、中国本土にも目を向ける必要がある。横穴式石室はやがて百濟地域の主墓制として定着し、形態や社会的性格が変化しつつ百濟時代の終焉まで存続する。明確な羨道を持たない横口式石室や規模の小さい横穴式石槨と呼べるものもあるが、これらには完全な横穴式石室が成立する前段階の過渡的形態と、横穴式石室の簡略化形態の二通りがある。百濟地域における横穴式石室の成立は地域ごと多様な様相を見せており、遺跡ごと個別の検討が必要である。

従墓制・少数墓制(甕棺墓・瓦棺墓・火葬墓・横穴墓)

一古墳群内において、主墓制(木棺墓・竪穴式石槨墓・横穴式石室墳など)に対し「従」の位置付けになる墓制には様々なものがあるが、なかでも甕棺墓・瓦棺墓(図9-1)はその代表である。百濟地域では甕棺や瓦棺のみからなる古墳群は確認されていないため、小児墓など同集団の中での格差として理解するのが妥当であると思われる。ただし、これら従墓制の多様な在り方に対する具体的検討はほとんどなされておらず、今後の課題である。

百濟の最後の都であった扶餘地域を中心に、火葬骨蔵器と推定される土器が出土している[姜仁求 1972]。ただし、近年の調査では確実なものは発見されておらず、過去に百濟の火葬墓とされたものの中には統一新羅時代のものも多く含まれている[山本 2003]。百濟では、少なくとも最高位階層の人々は最後まで石室に埋葬されており、それ以外の階層や地方勢力でも石室墳への埋葬に終始することから、少なくとも火葬に付された人々はきわめて限定されていたことがわかる。骨蔵器と推定されるものは大部分が擬宝珠形つまみを持つ碗や壺であることから、仏教の影響を強く受けた僧侶や一部信徒が限定的に受容したものであろうか。王族が火葬を奨励し、古墳群中にも火葬骨蔵器が含まれる新羅のケースとは対照的である。

百濟地域における横穴墓の存在は比較的早くから指摘されていたが、その実態は長い間不明であ

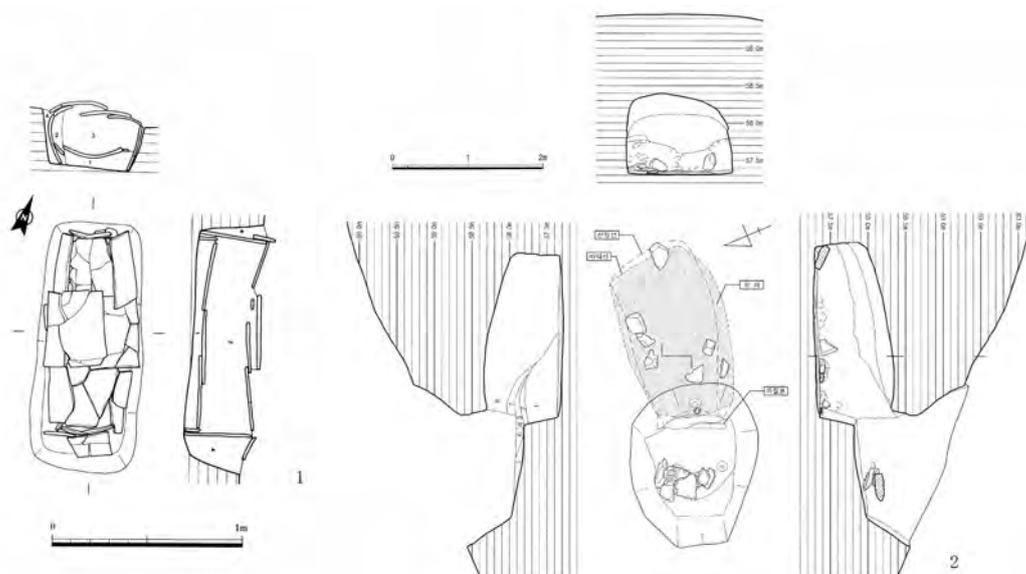


図9 瓦棺墓と横穴墓 [李尚燁 2001, 朴大淳・池珉周 2006]

(1. 瑞山餘美里 I-4 号墳 2. 公州丹芝里 4-12 号墳)

り、具体像が判明したのは公州丹芝里遺跡（図9-2）の調査・報告によってであった〔朴大淳・池珉周2006〕。横穴墓も公州・扶餘周辺に限定された特定時期の墓であるため、特定集団に関連する墓制と考える向きがある。今後、発掘の類例が増加するか否かが、百済地域の横穴墓の評価に関わってくる。

以上の百済地域の主だった墓制をみると、根本において木棺の使用という伝統的な墓制を維持しながら、外来墓制の導入が数次にわたって行われたことがわかるが、その際にポイントとなるのは新来の墓制を導入した階層や導入の背景であり、その解釈が百済王権とその他の階層の関係を明らかにする糸口になるものと考えられる。

2 時期設定と遺跡の編年

次に百済地域の考古学において使用されている時期設定について概観し、それに対する私見と、上に見た墓制の変遷との関係について触れておく。考古資料の編年は土器を中心に研究が蓄積されてきているが、百済時代を遷都を基準に漢城期・熊津期・泗泚期の三時期に分ける枠組みは古くからあり、考古学でも無条件に使用されている。以下、その内容を再検証してみたい。

まず漢城期は現在のソウル市江南（漢江南岸）に都（漢城）がおかれていたとされる時代で、歴史的には百済の建国から高句麗の侵攻による漢城の陥落と蓋鹵王の死、熊津への逃避的遷都（475年）までである。その始まりは当然ながら文献の内容をどう評価するかによって変わってくるが、紀元前1世紀からの初期記録を百済史の史実として認めるのはあまり現実的ではない。韓半島の国家形成に関する文献史研究の視点からも、古爾王代（在位234～286）以降を本格的な国の体制が整った段階とみているようである〔金泰植2003〕。一方、考古学ではソウル市にある夢村土城と風納土城、石村洞・可楽洞古墳群などの城郭や大型墳墓の出現、そして土器様式の成立などの検討をもとに、3世紀半ば頃に百済が国家として成立したとする説が提示されている〔朴淳發2003〕。風納土城の調査の進展により、最も重要なポイントである城郭の出現の時期に関して諸説が出されているが、百済時代の始まりを画する上で重視すべき基準資料は共通している。漢城期の終わりに関しては風納土城の放棄などを考古学的指標と考えることもできるが、やはり漢城陥落という歴史的な事件を前提とした解釈であり、考古資料のみから画期を設定するのは難しい。

熊津期は現在の忠清南道公州市の錦江南岸に都（熊津）がおかれていたとされる時代で、歴史的には漢城陥落による逃避的遷都から聖王による泗泚への計画的再遷都（538年）までである。もともと王陵群とされていた宋山里古墳群から墓誌を持つ武寧王陵が発見されており、歴史的な存在である百済と当該地域の考古資料を確実に結び付けることができる。本稿のテーマのように王権を考古資料から跡付ける試みでは、王や王族の墓制が明確であることの意義は大きい。ただし、この時代を一つの時期として分期しようとしたときに、考古資料の変遷にその画期を見出すのはやはり困難である。土器や古墳の編年では依然として漢城と熊津を明確に分ける基準は示されておらず、漢城から熊津への連続した編年案が提示される傾向がある。逆に言うと、考古資料の相対編年に漢城期・熊津期の分期が明確に記されているものも、その根拠は薄いと云わざるを得ない。発掘資料について、それが漢城期のものか熊津期のものかといった議論をよく耳にするが、資料自体からそれを判別する明確な基準はない。

泗泚期は現在の忠清南道扶餘郡に都（泗泚）がおかれていたとされる時期で、歴史的には遷都から新羅・唐の連合軍の侵攻による泗泚城陥落および百済の滅亡（660年）までとして区切られている。この時期になると歴史の実体としての百済の存在が出土遺物や遺構などの考古資料にも頻出し、王陵級古墳以外にも都城や寺院など拠点ないし中心勢力に関わる施設が急増し、王権や国家の実態を考古学的に検討することも比較的容易になる。また、土器や古墳など代表的な考古資料に大きな変化がおこるのもこの時期であり、規格化された「百済後期型石室」や台付碗を中心とする「百済後期様式土器」など、それ以前の百済の資料とは明確に区別されるものが出現・定着する〔山本2002・2006〕。つまり、百済の考古資料の変遷の画期はこの時期にあるといえる。ただし、この画期は泗泚遷都の時期と必ずしも一致するものではないため、歴史的時期区分と考古学的時期区分はやはり区別して考えるべきである。また、歴史的に百済が滅亡した際、考古資料がどのような変化を見せるのかは、歴史的な事象と考古資料の変化のすり合わせ作業において重要かつ興味深い問題である。三国時代の韓半島で、遺構や遺物に国の消長が比較的敏感に反映されていることは周知の通りであり、百済滅亡後に百済地域に新羅の文物が流入する現象が見られるが、その時期を660年以降に限定していいのか、660年以降に百済の文物がなくなるのかという点は、考古資料に立脚した検討が今後必要である。

以上のような時期区分観による解釈の枠組みと、そこから見えてくる問題点を挙げておく。まず、遷都により国の中心地が動いたということを前提に、それぞれの都の周辺から出土する遺物や近隣に立地する遺跡をすべて当該期のものとする傾向があった。しかし三国の攻防の履歴を考えると、例えば現在のソウル市近辺で確認される資料が百済・高句麗・新羅すべての国に帰属される可能性がある。各時期における都城遺跡が比較的明確であるという点は、王権や中心勢力の動向をうかがう上ではきわめて有効であるが、それには編年の確立と物質文化の帰属問題が解決されている必要がある。百済考古学の編年でも三足器などの代表的な土器が大きな役割を果たしているが、百済土器の不統一性や体系的な窯資料の欠如が、他地域に比べ、詳細かつ安定した編年作業を困難にしているのも事実である。相対編年に対する絶対年代の根拠は、主に古墳や都城など百済の遺跡から比較的多く出土する中国産陶磁器の年代によるところが大きい。陶磁器は中国の墓誌を持つ古墳などから出土する資料により年代が確定的なものが多いため、百済考古学の年代決定にも大きな役割を果たしているが、東アジアの馬具研究など、他資料の年代観との間の乖離も大きく、研究者ごとに共通する年代観が得られていない状況である。

これらの問題が解決され、考古資料のみのより詳細な変遷をたどれるようになってこそ、これまでの歴史的時期区分を克服し、百済考古学独自の年代観の枠組みが描き出せると思われる。

②……………百済墓制の階層性と被葬者

1 墓制の階層性を表す要素

上の内容を前提とし、墳墓間の政治的な階層性（権力の所在やその集中度・強弱）を抽出し、墳墓資料から王権の性質を明らかにするために、ここではまず被葬者の位相を表しているとみられる

墳墓の構造と形態、規模、副葬品、立地・分布・数の属性を再確認する。

墳墓築造法や構築材料の精巧さ、外形・構造の象徴性の有無は、被葬者の社会的な地位を相対的に表す場合が多い。前述のように百済地域で多様な構造・形態を持つ墳墓が築造されたのも、一つには地域・集団の差別化という側面もあるが、他方では他集団・他地域に対する自集団の優越性・隔離性の表現としての役割も看過できない。後述するように、実際に百済地域でも優れた技術的・文化的特徴が反映された構造・形態を持つ墳墓が特定集団によって導入されており、それは権威の差を反映しているように見える。墳墓がある種の規制・規定または統制のもとで築造されるようになった段階では、墓制の種類は均一化されるものの使用石材の加工度や構築法には被葬者の身分による差が顕在化しており、構造上の差となって表されている〔山本2002〕。

古墳の規模と被葬者の地位の対照はごく一般的な研究視点である。墳墓築造に投入された労働力の大小は、当該社会の中で被葬者やその後継者がいかに多くの労働力を動員し得たかという点に関わる。当時の東アジアで喪葬令・薄葬令の内容に階級ごとの規模の制約がある点からも、墳墓の大きさと被葬者の身分に深い関わりがあることがわかる。これは古墳の墳丘だけでなく、石室などの埋葬施設にも適用されることがあるが、特に百済の横穴式石室は、大型墳丘と豊富な副葬品で権力の巨大さを可視的に表現する時代を過ぎ、墳墓の築造に大きな労働力を投じなくなった段階の墓制で、個別古墳の墳丘規模には明確な差が見られない。にもかかわらず、高位と低位の石室には微細ながらも確実に規模の差が見られる。政治的中心がおかれていた地域、特に土城や山城など中心施設に近い位置にある墳墓の規模が周辺地域のものとは隔絶している状況から、そこには中央勢力とその周辺勢力の間の社会・政治的位相差が反映されているとみられる。ただし中央から遠く離れた地方にも時として中央と大差ない規模の墳墓が築造されることがある。それについては政体の軍事的拠点ないし地方の行政機関、あるいは独立性を保っていた地方勢力などの解釈が可能である。

副葬品の質・量や威信財の存在、威信財に見られる段階的質差などは被葬者間の身分の差を最も顕著に表す要素といえる。着装型威信財である金属製装身具類や保有型威信財である中国産陶磁器の出土は、百済地域の墳墓の被葬者の性格や社会的身分を考える上で重要である。定型化した横穴式石室墳が各地に広がる段階には副葬品がきわめて貧弱になるが、被葬者の身分を表す冠飾や帯金具など服飾関連の遺物は引き続き確認される。政体の特定官人層の身分表象であろう。

古墳の立地環境などは墳墓自体の構造や規模、副葬品などとは異なり、階層を直接表現するものではないが、優越的な立地や分布を持つ古墳群は確実に存在する。百済地域の場合、都城推定地の至近に立地する古墳群は有力勢力の埋葬地の候補である。これらは規模や構造、副葬品面でも他の古墳群を凌駕する傾向が見られる。後述のように、隣接して陵寺や殯宮推定遺構がある場合もあり、王族の埋葬地を推定する上でも根拠となる。さらに、地方に分布する古墳についても、政体が地方統治の際に重視していた地域の山城に付属する古墳群があり、軍事・行政拠点とその周辺に埋葬された集団との関係をうかがうことができる。派遣官人や在地有力首長層を埋葬した古墳と判断できる。

上のような諸要素の検討から、墳墓の相対的なランク設定と、王族－中央貴族（官人層）－中央派遣の地方官・在地の地方官などの具体的な階層への適用が可能になるとと思われる。

2 百済の「王陵」「官人墓」の判定

王権の消長を語る際に必要な基準となる墳墓が王陵ないし王族墓であるが、実際に「王の墓」であることが確実なものはほとんどない。特定の古墳や古墳群を百済国王や王族の墓とみなすためには相応の手続きが必要である。以下、様々な状況から王陵と判定され得る状況について概観する。

a. 古墳から文献と一致する文字資料が出土した場合

百済には、墓誌の出土により王陵であることが確定している古墳が1基のみ存在する。公州宋山里古墳群中にある塼築墳の武寧王陵は、墓誌の内容から523年に死亡した百済の第25代に数えられる斯麻王とその王妃の墓であることが確実であり、これにより6世紀前半代の百済王陵の構造・規模・副葬品・立地がわかる。何よりも、都城の近隣に王族の墓域が営まれ、遷都とともに墓所も新都の近辺に動くという事実が再確認された意義は大きい。百済の歴代王陵を比定する際には、この武寧王陵の諸属性を起点として、そこから類推されるべきであろう。この基準により、文字資料の出土はないが確実に王族墓とみていい古墳に、武寧王陵とほぼ同様の構造・規模・立地を持つ宋山里6号墳がある。塼の使用・不使用に王と王族の差などが内包されているのか判断が難しいが、最高位の墓制であることは疑いない。さらには、墓域を同じくする宋山里古墳群全体についても、規模・構造・立地・構築技術などが優越するものは王族の墳墓としてよいであろう。

b. 古墳周辺にそれと関連する文字資料がある場合

扶餘の陵山里寺址は、百済昌王銘舍利龕の出土から王の菩提を弔うために建立された寺院（陵寺）であったことがわかる。隣接する陵山里古墳群は都城遺跡に最も近い位置にあり、横穴式石室の構造・規模・構築技術の面からみても同時期の他の古墳より優越しているため⁽²⁾、陵寺とセットになる王陵群とみて差し支えないであろう。さらに言えば、舍利龕に名が刻まれた泗泚期の王である昌王（威徳王）の墳墓が含まれている可能性は高い。

c. 古墳の立地が文献に記録された墓所・拠点と一致する場合

日本列島で古墳時代にあたる天皇陵はじめ陵墓を比定する作業は、文献に記された埋葬地の記録によるところが大きかった。韓半島では、残念ながら王の葬地に関する内容はきわめて少ない⁽³⁾。おそらく国の中心として都城が発達した社会であり、王族の墓域が都城に隣接して設定されていることは、わざわざ記録するまでもない暗黙の伝統だったのであろう。墓所の位置が明示されているわけではないが、7世紀に遷都が計画されたとする説も根強い益山の地にある通称「大王墓」と「小王墓」からなる双陵は、構造・規模から百済の最高位相の古墳であることがわかる〔有光1979〕。武王（在位600-641）に関連する説話や同時代の巨大寺院である弥勒寺跡、宮闕遺構と考えられる王宮里遺跡がある益山において独立的位置を占める双陵が、武王自身の墳墓であると考えても不都合はない。

d. 隔絶した規模を持つ古墳が文献に見られる政体の中心地と年代的・地域的に一致する場合

ソウルにある石村洞古墳群を漢城期の王陵とみる視点は、王城と推定される夢村土城や風納土城の至近にあり、規模や構造の上で卓越していることが大きな理由である。4世紀代に編年されることから、百済の国力を高め領域を大きく拡大した近肖古王の墳墓を最大の積石塚である石村洞3号墳に比定する説がある。ただし、現在開発が進んだ石村洞一帯にはかつて多くの古墳があり、詳

細がわからないまま消失した大型古墳があった可能性を否定できない点は注意を要する。公州宋山里古墳群や扶餘陵山里古墳群も、もともこのような観点から王陵に比定されていた古墳群である。本稿でも、のちに触れるように百済王権の対外・対内政策に外来墓制が大きな役割を果たす特性から、漢城期の王陵の候補として基壇式積石塚を挙げておきたい。

e. 古墳から文献に記録されたものが出土した場合

被葬者個人に帰属される古墳出土遺物のうち、文献にも記述があるものは、ほぼ服飾・装身具資料に限られる。武寧王陵の発見により、特定時期の百済王が、少なくとも埋葬時にどのようなものを身に付けていたのかが明らかになった。その内容は史書に記録された王族の装身具と矛盾するものではないが、他に確実な王陵からの出土品が知られておらず、また文献の内容も具体的な形状などを描写したものではないため、より詳細な検討は困難である。この観点が有効であるのは、むしろ調査例が多い周辺古墳群から稀に出土する、高位官人が身に付けていたとされる冠飾などである。百済後期型石室から限定的に出土する銀花冠飾は、文献に百済の六位以上の官位保持者が着用を許されたことが見える「銀花飾冠」を指す可能性が高く、装飾の度合いからも被葬者の階層を類推することが可能である〔山本2002〕。

③……………墓制の変遷相と王権の動向に関する考察

1 各段階における百済墓制の特性

以上に確認した内容から、百済地域の墓制がどのような流れで変化し、そこにどういった社会の変化が内包されているのかについて見ていく。各墓制の年代はこれまでの研究で利用されてきた土器や陶磁器、墓型式、墳墓の地域的分布などに負うところが大きい。各年代に関しては研究者ごとに埋め難い見解の差があるため、ここでは特定の古墳や古墳群が漢城期のものか熊津期のものかといった議論はひとまずおき、墓制の変遷相のみに焦点をあて通時的に概観する(図10)。

第1段階

まず、百済墓制の伝統的基本形である木棺墓が様々に展開し、外来の墓制も加わって地方ごと集団ごとに多様な形態を見せるのが初期の特徴であるといえる。具体的には、文化的同質性がみとめられる原三国(馬韓)段階の共通的な周溝土壙墓(木棺墓)から木棺墓・木槨墓・木棺封土墳・墳丘墓・竪穴式石槨墓が発展し、横穴式石室墳や積石塚などが外部からの影響で導入される。この段階では、それぞれの墓制の造営傾向が地域・集団ごとに異なる方向に向かったことこそが重要であり、その点に地域色・集団色を打ち出すことによる集団ごとのアイデンティティの発露がみとめられる。共通した基本形を保ちつつ細部のモチーフや構成が異なる冠帽や飾履などがこの段階の各種墳墓から出土することも、中心勢力とのつながりや地域全体への帰属意識を保ちながら各地の在地首長層が他者とは区別される自己を表現しはじめたことを物語っているようである。この段階には、墳墓の種類による被葬者の力の差はあったとしても、少なくとも墓制の上からは明確な求心性や序列・秩序はみとめられず、それぞれの地域集団の個性が際立っているように見える。

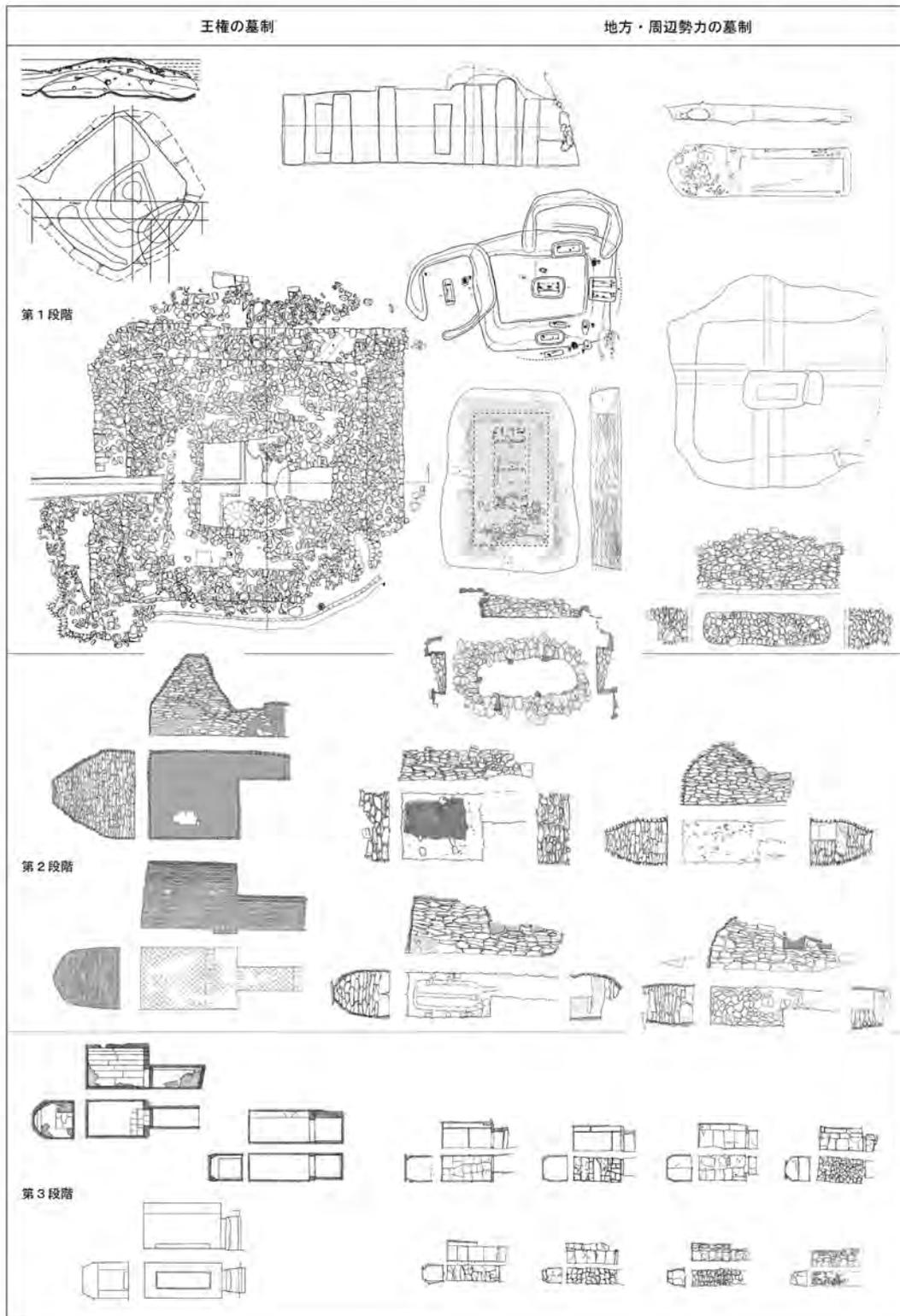


図 10 百濟地域の墓制変遷図(縮尺不同)

第2段階

次の段階の特徴は、一言で表すと墓制の種類を集約化と序列化である。前の段階で序列が見られないとしたのは、墳墓の種類がきわめて多様であったがために、同列の視点から墳墓ないし被葬者の優劣の差を判断するのが困難であったことによる。ましてや段階的な位相差を設定するのは至難である。それに対し、この段階では、ある程度墳墓の種類が統一が図られ、それが求心的であった結果として、中心と周辺、中央と地方といった墳墓による明確な対比が可能になったといえる。序列の重層化が最もよく見られる地域が政治的中心と目されている地域で、公州地方がそれにあたる。具体的には、土壙木棺墓や木槨墓など伝統的な墓制は徐々に姿を消し、竪穴式石槨墓など木棺墓から発展した新しい石築墓系統の墓制の頂点に立つ形で横穴式石室墳が各地域・集団の墓制として浸透・定着し、重層化する。横穴式石室が百済地域の主墓制の位置を占めるようになる段階である。

第3段階

最終段階の特徴は、百済地域の墓制がほぼ横穴式石室ないしその簡略形である横口式石槨に統一・均一化し、その斉一的な墓制の中に若干の規模や使用石材の加工水準などによって階層化が見られるようになる点である。この階層化構造は前段階までの単なる被葬者間や地域間の優劣・劣勢の差や比較的単純な序列の表現とは異なり、一定基準による墳墓の築造統制によると考えられる。被葬者が官人であることやその官位を段階的に表す冠飾や帯金具が出土し、さらにそれらが石室の位相とも対応することから、政治的中心（国家・王権）による埋葬行為の規制があったことがうかがえる。墳墓の被葬者が有力氏族や貴族、地方の有力勢力から官人層に移行し、半独立的であった集団が中央・地方官制に編入され、権力表現の規制がさらに進んだ段階といえる。

このように、百済地域を全体としてみると、墓制は多様化（第1段階）、集約・序列化（第2段階）、均一化（第3段階）の段階を踏んで変遷していることがわかる。この変化の要因は、第1段階では各地域集団の成長とアイデンティティの発露に、第2段階では新来埋葬観念の流行と定着および有力勢力の台頭と均質な墓制による優劣の表現に、第3段階では中央政権による身分秩序の再編と墓制への適用に求められるであろう。第3段階において、墓制が伝統文化的産物であることを離れ政治的産物として統治に利用されるに至っている点は、墓制の性格の重大な変化を表す注目すべき部分である。

では、このような百済地域の墓制の展開の中で、王権の墓制である王陵は周囲の墓制とどのような関係にあり、どのような役割を果たしたのか。上の内容に王陵の展開を当てはめることにより、王権の動向をうかがってみたい。

2 王陵と他階層墓制の比較からみた王権の消長

本稿では、同時期に百済地域に存在した古墳のうち、王陵とその他の墓制の間の構造・規模・副葬品・立地に見られる格差が大きいほど国家内における王権の優越性が際立っており、その格差が小さければ王権は他の有力集団（階層）の中に埋没していることを表すという考え方に立論する。以下では、上で見た墓制変化の大筋の流れに絡める形で、百済地域における王と王権を意識しながら、その最高支配者階層の墳墓が中心墓制・地方墓制・下位墓制などどのような関わりを持って

展開したかを確認することで、周辺勢力ないし地方勢力に対する王権の優位性の強弱について解釈を加える（図 11）。

1期：王権の揺籃期

等質な木棺墓の中から墳丘・葺石を持つもの、外来の威信財を持つものが出現する段階で、特定地域に大型墳墓が出現することから、それが百濟の国家形成を表す事象の一つに数えられている[朴淳發 2003]。都城や新しい土器様式の出現が伴い、文献の建国記事があるため、現在のソウル市の漢江流域で成長した集団（百濟）が唯一の有力勢力として台頭したと認識される傾向があるが、実際には墳墓のみの状況から他地域との隔絶性を見ることはできない。漢江流域の石村洞5号墳などの木棺封土墳は、墳丘規模の大型化はみとめられるものの、埋葬施設の構造は前代と変わらず、その規模などにも大きな差は見られない。漢江流域以外の地域にも大型の墳丘を持つ墳丘墓は存在しており、王権と呼べるものが誕生していたとしても、周辺の集団との権威の差が墳墓には大きく表れていない段階といえる。この時期を国家成立の時期ないし王権誕生の時期と仮定したとして、その権力は局地的なものにとどまり、広い地域に浸透するに至っていないことをうかがわせる。

2期：王権の成長期

上記のような状況を打破し、他集団・氏族・地域との違いと隔絶性を明瞭に打ち出そうとした試みの結果が、従来の伝統にない外来墓制の導入であったと考える。その試みは、それまで在地で使用しなかった異質の素材・技術（石材加工・構築技術）を用い、かつてない労働力を投入して視覚的にも効果的な形態・規模の墳墓を造る必要があった。その結果が漢江流域に築造された石村洞古墳群に見られる高句麗式の基壇式積石塚である。ここに至り、漢江の王権は周辺勢力から頭一つ抜け出し、また対外的にも当該地域唯一の王権としての成長をアピールすることができた。対外交渉を表す文物の流入が増え、文献に領域拡張の記事が頻出するのもこの時期の状況を表すものであろう。漢江の王権以外に、この段階で構造・規模の上で従来の墓制から飛躍的な変化を遂げたものはなく、積石塚という特殊な形態の墳墓も分布が拡大することはなかった。王権が主導的に各地の墓制の転換を推進したり、他集団がそれを追従することもなかったことを示している。ここで王権と周辺勢力との格差は一時的に大きく広がったことがうかがえる。

3期：王権の衰退期

その後、百濟地域では各地で散発的に横穴式石室の築造が始まり、それが在地の伝統墓制を引き継いだり、あるいは在地墓制の上に立つ形で定着していく。この現象は、現在のところ王権が積極的に主導した墓制の転換とはみられず、地方の古墳群で先行して起こったと考える向きもある。近年の京畿道地域における初期横穴式石室墳の調査を受け、王権ないしその周辺で横穴式石室が早い時期に導入されていた可能性が再びクローズアップされているが、その場合でも、各地域集団と同質の墓制を王権が再び採用したことには、その背景に積石塚を築造していた段階とは異なる事情を想定する必要がある。公州の宋山里古墳群に築造された比較的大型の横穴式石室に王陵ないし王族の墳墓が含まれていることは、先に推定した王陵の判断基準の内容からも十分に首肯できる。しか

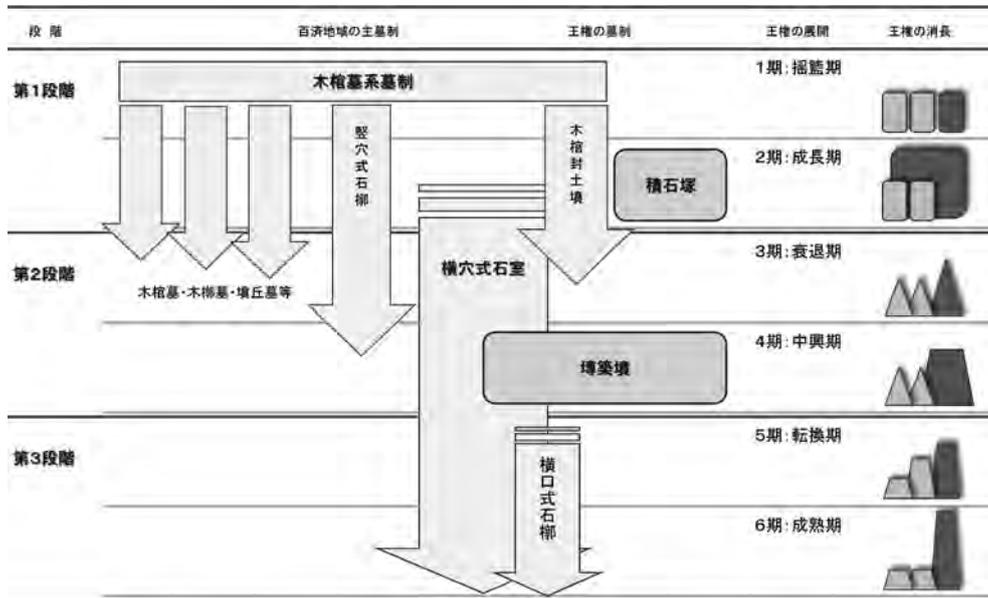


図11 百濟墓制の展開概念図
右端の図形の濃いアミカケは他墓制に対する王権の墓制の相対的な大きさを示す。図形の種類は墓制の種類を異同を表す。

しその内容を見ると、宋山里古墳群の横穴式石室は規模・構造ともに隔絶した位置を占めるには至らず、同種の墳墓間における若干の優越性が見られるのみで、地方にもさほど変わらない規模の石室は存在する。この状況からは、前段階に突出した王権が再び衰退し、地方の有力勢力程度の水準になったようにも見える。この現象を文献に記録された475年の漢城百濟の陥落と王権の断絶に結び付けることも可能であるが、積石塚築造の放棄と横穴式石室の採用が王権内でいつなされたのかにより、王権の衰退減少に対する解釈は異なってくる。5世紀前半から中頃にかけての王陵の変遷が不明である以上、王権の動向の変化に対する解釈は慎重であるべきである。

4期：王権の中興期

この段階に至り、百濟地域の最高階層では、新たに伝統墓制の位置を占めつつあった横穴式石室とは異なる墓制の採用を試みている。王陵であることが確実な武寧王陵や宋山里6号墳などで中国南朝の埴輪墳を採用している状況がそれにあたる。また、武寧王陵は中国の墓制の模倣にとどまらず、鏡などの副葬品やコウヤマキ製の木棺などに見られるように、日本列島の葬送祭祀伝統も取り入れている。中国や日本列島などの外部の文化表象を利用することで諸外国と結び付いていることをアピールし、周辺勢力や他の階層および地方との隔絶性を表現したのであろう。その意味で、この時期の外來墓制の採用は、実質的に諸外国との連携を深める対外的な政策であるとともに、他国との結び付きを背景に内部的にも王権の強化を図った試みであるといえる。2期の積石塚と同様、埴輪墳が他の地域集団や他階層に受け入れられていないことから、王権のみが築造できた専用墓制として認識されていたとみてよい。6世紀前半のこの時期が百濟史の中で中興的位置付けであり、考古資料の上でも文化的転換期の起点にあたっていることから〔山本2008〕、このような周囲階層

との隔絶性のアピールはある程度奏功したと考えられる。逃避的遷都により凋落した王権が、この時期に復権した状況と一致する。

5期：王権の転換期

前段階の状況を受け、次の段階では百濟の政治と文化が大きく変化する。墓制の上では再び王権の墳墓が周辺階層と同質化する状況が見られる。その顛末は、塼築墳の築造停止後にその構造のみを模倣した横穴式石室が造られ（扶餘陵山里中下塚）、それをさらに簡略化した形態の石室が王陵に定着し（百濟後期型石室）、以後周辺集団や地方集団でもことごとくその墓制を採用するに至るという過程である。この段階に至り、百濟地域内の墓制はほぼ完全に百濟後期型石室に均一化し、規模や石材加工の面で段階的な階層化が図られるのであるが、王権の墓制がその中に組み込まれる点は重要である。すなわち、王陵および王族墓と考えられる陵山里・陵山里東古墳群の横穴式石室は、使用石材・規模・立地の上では多少の優位性がみられるものの、構造・形態は官人墓と考えられる墳墓と同一で、あたかも百濟墓制の全体的な斉一性の中に埋没してしまっているように見える。ただし、新都の造営や政治・思想・文化的に転換を図るなど、この時期の百濟は対内・対外的に多くの施策を打ち出しており、王権の権勢弱体化などの現象は、考古資料・文献史料の上で明確に見られない。おそらくこの時期に法制度や身分制度を整え、官僚政治へと完全に切り換えた百濟では、王権をもその中に組み込み自らその一員であることを実践することにより、周辺氏族や地方勢力を完全に取り込もうとしたのではないか。6世紀半ば頃を境に全羅道地域を含む地方の隅々まで百濟中央式の文化や墓制が浸透していることから、その試みは成功したといえる。王陵を含む墓制の統一は、王権自らを新身分秩序の中に編成することによる墳墓築造を通じた国内統治の手段であったと評価できる。ただし、この状況は必ずしも王権の絶対性を示したものではなく、王族でさえも法の制約を受ける存在であることを表している。いわば王権が官人のトップとして位置付けられていたといえる。

6期：王権の成熟期

この段階の時代相は、仏教思想や法制度が定着し、人民の個別統治が推進された時期として規定できる。その内容は、百濟地域内部における寺院の盛んな造営や、墳墓の単葬化現象にも反映されている。この時期の墓制は前段階よりさらなる小型化を辿り、石室はごく簡略なものに変わる。百濟地域の墓制が全体的に薄葬傾向を強める中、その流れに逆行し、唯一前段階より規模を増したのが王陵である。武王の墳墓と推定されている益山双陵の大王墓は、構造面では同時代の他の横穴式石室と同様の形態を維持しながらも、規模と使用石材の面において突出しており、サイズは5期の同形の王陵より大型化している（図12）。また、立地の面においても、従来の王陵群が造営された扶餘の陵山里地域から離脱し、武王が遷都を試みたとされる益山の地に、推定王妃墓とともに単独で立地する。陵山里古墳群が山の南斜面に形成されているのに対し、益山双陵が丘陵上にあるのも大きな違いで、石室規模と併せて例外的に大型の封土を持つ墳墓であったことをうかがわせる⁽⁴⁾。この状況は、それまで縛られていた官僚制的身分秩序から王族を解放し、王権の法制度からの脱却を試みた結果と解釈することもできよう。一律的な法秩序による統治システムからの離脱は、一般的

な社会構成員から異なる存在への昇華を物語るものであり、当時の東アジア世界の状況を受け、王権の神聖化を百済王が試みていた証左ともとれる。大型建物や後背に苑池を備えた広大な益山の王宮里遺跡は、これまでにない新しい存在を目指した百済王権の象徴として造営された施設であると推定される。

まとめ

王陵と他階層の墳墓をその種類・構造・規模などの面から通史的に比較してみると、その階層差を伴う質的差は、時期に応じて拡大と縮小を繰り返す。この動向は他階層に対する百済王権の相対的な立場（優越・非優越度）を表していると考えた。それによると、百済の王権は成立期から一貫して絶対的な存在であったわけではなく、時勢によって他勢力の中に埋没したり突出したりする存在であったことがわかる。1段階／2期までの初期の墳墓に見られる地方勢力の独立性も百済王権の不安定さを物語り、その後の王権強化の過程と地方統治の状況も、墳墓によく表れているといえる。

百済王権が墳墓を利用して表現した特徴として、他者との区別を明瞭に打ち出す必要があるとき、滅亡の危機に直面し窮状を脱するときなど、王権の強化や隔絶性をアピールする必要があるときに、外来墓制を導入して一時的にその異質性を活用しているという点が挙げられる。その意味で、墳墓の構造・形態や規模などの威容も外来の威信財と同様の機能を持っていたといえる。他国・他地域との抗争・協力関係の中で、百済王権が国内における優越性を獲得・維持しようとする意図と努力を

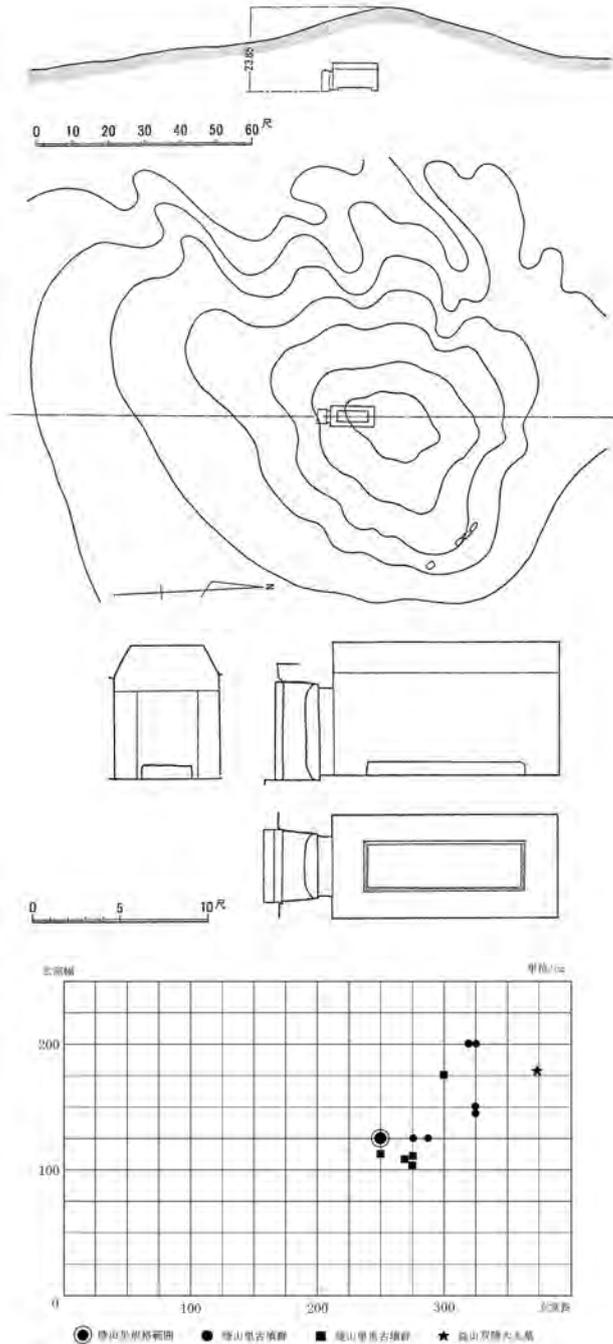


図12 益山双陵大王墓の墳丘と石室(上)[有光教一 1979],
陵山里古墳群と益山双陵大王墓の石室規模比較(下)

示すものであろう。当然ながらその動向は墳墓以外の考古資料にも示されている。

墳墓に見られるこのような展開過程に文献百濟史をあてはめると、王権の消長の歴史的背景をうかがう一要素ともなるが、その場合、墓制変化に対する恣意的な解釈に陥る危険性も常に残る。そのため、本稿では既存の時期区分をなるべく排し、考古資料を中心に据えた検討を試みたが、やはり歴史記録の内容を念頭に置いた分析になっている感は否めない。研究者ごとの年代観の差が問題となっている百濟遺跡の編年を精査し、墳墓の年代観が安定してこそ、本稿のテーマのような王権の盛衰についても、より正確に把握できるようになるであろう。

註

(1)——百濟地域の墓制において石材使用が始まり、やがて切石造の横穴式石室や石塔など高度な石造物を造営するに至る過程は、古墳時代後期以降に日本列島に伝わった石材加工物・加工法を検討する上でも重要なテーマである。百濟の石材加工技術の発展史について、別稿で検討したい。

(2)——この時期の百濟の横穴式石室は一定の規格を持っており、その規模は高位官人層を根本基準にしたものである。陵山里古墳群の石室規模はほぼ唯一この規格規模にとらわれずに築造されている〔山本2002〕。

(3)——火葬の上、海に散骨ないし納骨したと伝えられ

る新羅の文武王の例などは、墓制・葬法の中でも特殊なケースである。

(4)——この時期の百濟の横穴式石室墳は丘陵斜面を削って半地下式の構造としており、石室は総じて小型で、土は石室を覆う程度であったため、発掘調査でも封土が確認されることはほとんどない。王陵もさほど変わりなく、現在大型の封土が見られる陵山里古墳群も、もとの大きさではない。益山双陵は、石室の大きさもさることながら、平坦部に築造されているため、封土も当初から比較的大きかったと考えられる。

参考文献

(日本語)

- 東 潮 1993「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』47
 東 潮・田中俊明 1989『韓国の古代遺跡』2(百濟・伽耶篇)中央公論社
 有光教一 1979「扶余陵山里伝百濟王陵・益山双陵」『檀原考古学研究所論集』4 吉川弘文館
 有光教一・藤井和夫 2002『朝鮮古蹟研究会遺稿Ⅱ』財団法人東洋文庫ユネスコ東アジア文化研究センター
 安 承 周 1972「公州地方の百濟古墳」『百濟の考古学』雄山閣
 金 基 雄 1976『百濟の古墳』学生社
 金 武 重 2013「百濟漢城期横穴式石室の構造と埋葬方法」『古文化談叢』69 九州古文化研究会
 野守 健・神田惣蔵 1935「忠清南道公州宋山里古墳調査報告」『朝鮮総督府昭和二年度古蹟調査報告』第二冊
 朴 淳 發 2003『百濟国家形成過程の研究』六一書房
 朴 淳 發 2008「百濟漢城期の地方編成過程」『百濟と倭国』高志書院
 山本孝文 2008「考古学から見た百濟後期の文化変動と社会」『百濟と倭国』高志書院
 山本孝文 2015「百濟後期横穴式石室の編年と埋葬構造」『古文化談叢』74 九州古文化研究会
 吉井秀夫 1995「百濟の木棺」『立命館文学』542 立命館大学人文学会
 吉井秀夫 1997a「百濟横穴式石室墳の埋葬方式」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会
 吉井秀夫 2010『古代朝鮮墳墓にみる国家形成』京都大学学術出版会

(韓国語)

- 姜 仁 求 1972「百濟の火葬墓」『考古美術』115 韓国美術史学会
 姜 仁 求 1977『百濟古墳研究』一志社
 京畿文化財研究院 2012『烏山水清洞百濟墳墓群』京畿文化財研究院・韓国土地住宅公社
 公州大学校博物館・忠清南道公州市 1995『百濟古墳資料集』
 公州市・忠清南道歴史文化研究院 2009『百濟人の墓』

-
- 国立公州博物館 2009『武寧王陵 新報告書1』
国立公州博物館・公州市 2012『宋山里古墳群基礎資料集』
吉井秀夫 1992『熊津・泗泚時代百濟横穴式石室墳の基礎研究』（慶北大学大学院碩士學位論文）
吉井秀夫 1997b「横穴式石室墳の受容様相からみた百濟の中央と地方」『百濟の中央と地方』忠南大学校百濟研究所
金承玉他 2010『上雲里I』全北大学校博物館・韓国道路公社
金元龍・林永珍 1986『石村洞3号墳東方古墳群整理調査報告』ソウル大学校博物館
金一圭 2015『百濟考古学編年研究』学研文化社
金泰植 2003「初期古代国家論」『講座韓国古代史』2 駕洛国史蹟開發研究院
柳基正・梁美玉 2002『公州金鶴洞古墳群』忠清埋藏文化財研究院
馬韓・百濟文化研究所 2012『高敏鳳德里1号墳一石室・甕棺一』馬韓・百濟文化研究所・高敏郡
朴大淳・池珉周 2006『公州丹芝里遺蹟』忠清文化財研究院・大田地方国土管理庁
朴淳發 1996「漢城百濟の中央と地方」『百濟の中央と地方』忠南大学校百濟研究所
山本孝文 2002「百濟泗泚期石室墳の階層性と政治制度」『韓国考古学』47 韓国考古学会
山本孝文 2003「百濟火葬墓に関する考察」『韓国考古学』50 韓国考古学会
山本孝文 2006「百濟泗泚期土器様式の成立と展開」『百濟泗泚時期文化の再照明』国立扶餘文化財研究所
ソウル大学校博物館・ソウル大学校考古学科 1975『石村洞積石塚発掘調査報告』
成正鏞 2001「4～5世紀百濟の地方支配」『韓国古代史研究』24 韓国古代史研究会
宋義政・尹炯元 2000『法泉里I』国立中央博物館
安承周 1968「百濟古墳の研究」『百濟文化』2 公州師範大学附設百濟文化研究所
安承周・李南奭 1993『公州新基洞・金鶴洞百濟・高麗古墳群発掘調査報告書』百濟文化開發研究院・公州大学校博物館
李南奭 1995『百濟石室墳研究』学研文化社
李南奭 1997『汾江・楮石里古墳群』公州大学校博物館
李南奭 1999a「百濟の横穴式石室受用様相について」『韓国古代史研究』16 韓国古代史学会
李南奭 1999b『公州山儀里遺蹟』公州大学校博物館・大田地方国土管理庁
李南奭 2000a「百濟古墳と益山双陵」『馬韓・百濟文化』15 圓光大学校馬韓・百濟文化研究所
李南奭 2000b「陵山里古墳群と百濟王陵」『百濟文化』29 公州大学校百濟文化研究所
李南奭 2000c『龍院里古墳群』公州大学校博物館・天安温泉開發・高麗開發
李南奭・李賢淑 2009『海美機池里遺蹟』公州大学校博物館・国防科学研究所
李南奭他 2003『塩倉里古墳群』公州大学校博物館・大田地方国土管理庁
李尚燁 2001『瑞山餘美里遺蹟』忠清埋藏文化財研究院・韓国道路公社
林永珍 2005「百濟漢城期墓制の多様性とその意味」『考古学』4-1 ソウル京畿考古学会
조가영 2012「石村洞古墳群の築造様相検討」『韓国上古史学報』75 韓国上古史学会
崔完奎 1997『錦江流域百濟古墳の研究』（崇實大学大学院博士學位論文）
崔完奎 2000「益山地域の百濟古墳と武王陵」『馬韓・百濟文化』15 圓光大学校馬韓・百濟文化研究所
忠清南道歴史文化研究院 2008『瑞山富長里遺蹟』
(中国語)
当涂県文物事業管理所 2008「当涂県新市来隴村六朝晚期墓群発掘簡報」『東南文化』2008-1

(日本大学文理学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017年3月23日受付, 2017年6月5日審査終了)

Development of Baekje Burial Practices and Dynamics of the Baekje Dynasty

YAMAMOTO Takafumi

This article aims to trace the dynamics of the Baekje Dynasty by analyzing tombs in the kingdom. The analysis consists of two steps: (1) verifying the transition of burial practices through the reclassification of tombs in the territory and (2) identifying the tombs of kings and royal families and tracing their development. The burial practices of Baekje are broadly classified into two types: (1) *local burial practices*, which were derived from wooden-coffin tombs and developed in various ways depending on the region or group they belonged to; and (2) *foreign burial practices*, including cairns and tiled tombs inspired from Koguryo and Chinese dynasties. These local and foreign burial practices of Baekje developed in three stages: (1) diversification; (2) convergence and stratification; and (3) uniformization. Throughout this process, the ruling class (kings and royal families) tried to differentiate their tombs from others, mainly by adopting foreign burial practices, but some royal tombs assimilated with those of the lower classes, which implies the instability of the Baekje Dynasty. Based on these changes in the vertical relationship between the royal and other tombs, this article explains the dynamics of the Baekje Dynasty in the following six stages: infancy, development, decline, revival, transition, and ripening stages. The Baekje Dynasty did not always maintain absolute control over its territory. It was rather unstable, sometimes isolated and sometimes forgotten. Moreover, the diversity of tombs in the territory suggests the existence of independent regional powers, which also exemplifies how unstable the Baekje Dynasty was. The adoption of foreign burial practices is considered as an example to highlight the will and effort of the Baekje Dynasty to establish and maintain its dominance in the territory while competing and cooperating with regional powers. Thus, a comparison of the development of burial practices and the written history of Baekje can enable us to explore the historical context of the rise and decline of the Dynasty though it is important to refrain from overemphasizing the written sources.

Key words: Baekje, wooden coffin tomb, stone chamber tomb, cairn, tiled tomb